



図書館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2009.October No.167



世界の図書館 ドイツ編

- | | |
|--|--|
| <p>1 「大学図書館の今日」
図書館長 尾上 修悟</p> <p>2 研究ノートから
色彩の向こう 文学部 外国語学科 英語専攻 講師 C. L. ドーハティ
ブラウジングルーム
郷土を楽しむ 図書情報課 山下 大輔</p> <p>3-4 世界の図書館 ドイツ編
ボン大学図書館 神学部 神学科 教授 寺園 喜基
ベルリン国立図書館 国際文化学部 国際文化学科 教授 井口 正俊
コンスタンツ大学図書館 法学部 法律学科 教授 勢一 智子</p> | <p>5-6 使ってみようシリーズ(11)
普段から図書館を使おう 図書情報課 小川 ゆきえ</p> <p>7 蔵書ギャラリー no.8
『商業学と商業実践のための雑誌』から『経営経済』へ 全69巻
商学部 経営学科 教授 野藤 忠</p> |
|--|--|

図書館はやがて消える。それは、電子情報機構にとって代わる。今から20年以上も前に、情報科学研究者のW.ランカスターはこう予言した(W.ランカスター著『紙からエレクトロニクスへ:図書館・本の行方』日外アソシエーツ、1987年[開架2階 020/2/7])。ところが実際には、図書館は、公共のものから大学のものまで含め、依然として消える様子を見せていない。否、それどころか、新しいコンセプトに基づく21世紀型の図書館さえもが模索され、かつまた現実に建築されている。ランカスターの予言は的中しなかった。

このように図書館が存続するのは、それが、電子情報システムにはない優位性を持つからに他ならない(井上真琴著『図書館に訊け』筑摩書房、2004年[開架2階 015/0/23])。確かに今日、情報を素早く取得する手段はそろっている。インターネットはそれを代表する。しかし、そこには落とし穴もある。最大の問題は、ネットの提供する情報の信憑性であろう(福田和也著『ひと月百冊読み、三百枚書く私の方法』PHP、2001年[開架2階 021/3/2])。そのほとんどは校閲を得たものではない。そこでは、情報提供者の責任は一切問われない。たとえそれらが偽りの情報であっても、情報利用者は訴えることができない。この点は、研究や学習を進める上で致命的欠陥として現れる。したがって例えば、統計数値は正しいのか、歴史的資料や引用文は本物か、等の点について逐一確かめる必要が生じる。それであれば、現物を自分の目で見た方がよい。同時に、その方が結果的に早い。その他にも、すべてのアナログ情報をデジタル化することは到底できない問題、あるいは、デジタル化された情報の永続的利用可能性の問題、等を指摘することができる。

要するに、取得すべき情報の質を真先に問うのであれば、我々はやはり、図書館所在のアナログ情報に頼らざるをえない。今日の世界は、まさにバイパス・システムで覆い尽くされている(竹田青嗣著『人間の未来』筑摩書房、2009年)。経済や社会、そして個人の領域において、成果を素早く、かつ苦勞せずにそれを勝ち取ろうとする意識が余りに強すぎる。そのようなシステムが、果して本当の成功に導くのか。今こそ、この点が問題とされるべきであろう。以上の文脈の中で、今日の大学図書館の位置付け、さらにはその存在意義も問われねばならない。井上真琴

氏は、大学図書館を「調べ、書く」ための図書館、と捉える(前掲書)。他の図書館と比べ、大学図書館ほどこの性格をはっきりと打ち出している所はない。それはつまり、大学はつねに研究機関として存在し、それを支えるのが大学図書館、という構図を指す。図書館は大学の顔、と呼ばれるのもそのためであろう。

一方、今日の大学図書館は、いくつかの解決すべき課題も抱えている。まず、研究資料収集の充実に関連した問題がある。研究資料のコレクションは、言うまでもなく大学図書館の存在の根幹を成す。そこでは、単なる量のみならず質も問われる。貴重な資料を備える大学図書館は、それだけで内外にアピールできる。世界中の研究者が、その資料を使うことによって大学の名声も飛躍的に高まる。他方で、電子情報社会への十分な対応を考える必要がある。先に私は、情報取得に関して、紙媒体の優れた点をことさらに強調した。しかし現実には、ネット世代と言われる現代の学生の間で、図書館の利用率は全世界的に確実に低下している。このような事態にいかに対応すべきかが喫緊の課題となる。最近、アナログ媒体とデジタル媒体の融合からなるハイブリッド型図書館、という言葉をよく耳にする。事実、そのような図書館が、世界的に大学で続々と建築されている。研究者や学生の間で、電子情報の要求が強まっている以上、大学図書館も、それに応える必要がある。ハイブリッド型図書館の建設は、その1つの解決方法を示唆する。ただし、その際に気をつけておくべき点は、そのような図書館を情報の電子化への移行過程にある過渡的存在とみなしてはならない、という点であろう。さらに、大学図書館は研究のみならず、共同学習や教育、並びにキャンパス・ライフのアメニティ、等の向上をいかに達成するか、という課題もある。実際に、教育推進の場として大学図書館を活用する試みがすでに始まっている。大学図書館は今日、確かに新しい要素をますます取り入れることを求められている。これらの重要課題の解決に向けて、大学図書館が、共同性認識に基づいた情報の真の共有の場、知的・文化的資産の蓄積される場、そして大学と社会におけるコモン・ウェルスを実現できる場、として存在すること、このことを、我々は新ためて留意しておかねばならない。

(経済学部 国際経済学科 教授)

色彩の向こう

文学部 外国語学科 英語専攻 講師 C. L. ドーハティ

私が皆さんにお奨めするのは、デイヴィッド・バチェラー著『クロモフォビア』(色彩恐怖症)です。クロモフォビア(Chromophobia)とは、ギリシャ語で「色」を意味する chromoと、「恐怖症」-phobiaが組み合わされた言葉です。作者はこの本で、西洋社会に浸透していたモノトーン(単彩)嗜好を検証していきます。私は、日本でもこの傾向を強く感じ、寂しく感じる場合があります。卒業式などの祝典で黒を着ている人を多く見ますし、夢のマイホームは床から天井、家具から食器に至るまで白一色という場合もあります。

バチェラーは、「西洋では古代以来、色彩は一貫して、周縁に押しやられ、ののしられ、無視され、おとしめられてきた。『クロモフォビア』と述べています。作者は、クロモフォビアの形成過程を絵画、建築、映画などの具体例を使って説明しています。第一の過程では、色を原始的、幼稚なものとして捉えます。第二の過程では、色を表面的で不必要な飾りだと考えます。また、プラトンの哲学と修辞学の対立とアリストテレス派の美学における線と色彩の対立にも言及します。つまり、修辞と色彩は私たちを惑わし、真理を見えにくくするのであり、それらは装飾であって、本質ではないと考えられていたのです。徐々に色は、東洋、女性、魔力、過剰といったイメージに繋

がっていったのです。

バチェラーは、理性的で高次元の精神性を意味するモノクロと野生的で不合理の象徴である色彩を説明するために映画を利用しています。『ヘルリン・天使の詩』では、天使が高尚なモノクロの世界から、混沌とした、色彩にあふれた人間世界へ堕ちて来ます。『カラー・オブ・ハート』では、カラフルな1990年代の自由奔放な二人の十代の若者が、1950年代のモノクロのテレビ番組に迷い込み、穏やかな家族に騒動を持ち込んでしまいます。『オズの魔法使』のドロシーは、色で一杯のオズの世界からカンザスにある灰色の現実の世界に戻るために大冒険をするのです。

ところで、英語のcolor は、インド・ヨーロッパ祖語のKel (=cover, conceal「おおう、隠す」) が語源です。日本では色彩はどのように捉えられてきたのでしょうか。私は、この本で色について多くの発見をしました。皆さんもこの本を読んで、色彩を巡る冒険へ出かけてみませんか。

参考文献・映画

1) Batchelor, David, Chromophobia, Reaktion Books, 2000. 2) デイヴィッド・バチェラー著、田中裕介訳、『クロモフォビア: 色彩をめぐる思索と冒険』青土社、2007 [開架4階 757/3/61] 3) ウィム・ヴェンダース監督『ヘルリン・天使の詩(Wings of Desire)』CBS/Sony, 1987 ビデオ[視聴覚 778/VT/BER] 4) ゲーリー・ロス監督『カラー・オブ・ハート(Pleasantville)』1998. 5) ピクチャー・フレミング監督『オズの魔法使(The Wizard of Oz)』1939



ブラウジングルーム

郷土を楽しむ

図書情報課 山下 大輔



図書館の閉架書庫を何気なく歩いていた時に、『福岡県百科事典』(注1)が目に入ってきました。私は、以前県内の公共図書館へ勤務していたことがあります。その際に、よく郷土関係のレファレンスに奔走したことを思い出しました。「散歩をしていて見かけた歌碑が気になる」「大宰府から都までの旅程はどの程度だったか知りたい」「江戸時代の地名は?」「家紋について調査したい」「〇〇神社の由来が知りたい」「古墳の調査報告書はあるか」…。新人の私に、容赦なく押し寄せる質問に苦慮したものです。どうしようも無くなって、地元の文化財に詳しい方を頼ったこともありました。ただ、この頃に郷土関係に係らず、幅広くこなしたレファレンスの数々は、図書館司書として成長する大きな基盤になったように思います。

さて、お世話になった数ある郷土資料の中でも、一番利用したのがこの『福岡県百科事典』であったように思います。1982年出版と情報の古さは否めませんが、福岡県に関する人文科学、社会科学、自然科学のすべての事象について、正確な知識を得るために必要な基礎的、資料的、かつ手引的な事柄が集大成されており、調査のきっかけには重宝しました。ピンとくる資料が思いあたらない場合に、とりあえず引いてみる。

もちろん、これをきっかけとして、各種資料にあたるのです。郷土資料といっても、歴史、伝記、市町村史、郷土作家の作品等多岐に渡ります。

本学図書館へ勤務するようになり、当然ながら郷土関係のレファレンスを受けることは、ほとんど無くなりました。少し懐かしく思い、他の郷土資料はどうだろうと思い館内を探してみました。まず、目を引いたのが『翰苑 卷第三十』(複製資料)(注2)です。これは、太宰府天満宮が所蔵している国宝で、唐時代の歴史書の最後の1巻(30巻目)の写本と言われています。倭国の項があり金印の記述もあるそうです。同じフロアを探索していると、福岡藩士貝原益軒による元禄16年の地誌『筑前國續風土記』(注3)、筑前黒田家の記録である『黒田家譜』(注4)、福岡県の歴史を綴った『福岡県史』(注5)を発見しました。このあたりは、定番資料でよく利用していました。

この他にも、たくさんの資料があります。近年はデータベースや電子ジャーナルの導入が目立っていますが、郷土関係の調査には、まだまだ不足しています。書物を手にとってじっくりと読み込む必要があるのです。郷土についてある程度の知識があれば、普段目にする風景も少し違って見えてきます。秋の読書の合間に郷土について紐解いてみるのもよいのではないのでしょうか。

(注1) 西日本新聞社編『福岡県百科事典』上・下、西日本新聞社、1982[開架1階 291/9105/1-1A~2A]
(注2) 『翰苑 卷第三十』複製資料、太宰府天満宮巻千七十五年大祭記念：一軸(28cm 箱入)、太宰府天満宮、1974[開架 210/3/207]
(注3) 貝原益軒著、伊東尾四郎校訂『筑前國續風土記』文献出版、1977[開架2階 291/91/46]
(注4) 川添昭二、福岡古文書を読む会校訂『新訂 黒田家譜』文献出版、1982-1987[開架 288/2/6-1~6-8]
(注5) 西日本文化協会編纂『福岡県史』西日本文化協会、1982-2003[開架 291/1/85-1-1~85-8-2]

世界の 図書館

[ドイツ編]



[ボン大学]



[現代的なポツダム館
ーベルリン統一後に開発されたポツダム広場に近接している]



[鳥の絡まるウンター・デン・リンデン館
ーブランデンブルク門の東に位置している]



[コンスタンツ大学遠景]

ボン大学図書館

ULB Bonn: Adenauerallee 39-41, 53113 Bonn
<http://www.ulb.uni-bonn.de/>

ボン大学図書館のこと

ボン大学は今からもう40年前に、学生として博士課程に4年間在学し、博士論文を仕上げた母校です。そのころはほとんど毎日、図書館に通い、資料を読んだり下書きを書いたりしました。また昨年の1月、研究資料の調査のために短期間、訪問しました。

ボン大学は1818年に創設されました。18世紀に建てられたケルン選帝侯の居城を内部改装してそのまま使用したもので、広大な芝生を前面にした黄金色の建物はそのまま絵になるような風景です。

この図書館は正式には「大学・州立図書館」と言い、ボン大学立であると共にノルトライン・ヴェストファーレン州立でもあるのです。現在位置に移転した1960年には約240万冊の蔵書が中央図書館、5つの分館、158の分室に収められているそうです。中央図書館は地上3階、地下3階からなり、エントランスホールが広々としています。入口にはクロークがあり、コートやカバンなどを預けて身軽



[ボン大学図書館]



[雑誌書架]

になり、必要な手続きをして本を借ります。わたしは、Stammtisch (シュタムティッシュ) と言って自分専用のブースを借りて、そこで仕事をしました。閲覧室が広いのも特徴で、大きな窓ガラス越しに、眼前のライン川を眺めることができます。ライン川には国旗、積み荷、形もさまざまな船が次々に通るので、眺めていると気分転換になります。また建物の一角にカフェテリアもあり、机はそのままにしておいて、コーヒーやケーキでリフレッシュしに行くこともできます。

昨年訪問した時は大がかりな改装の作業中でしたが、11月25日に工事が完成したことをホームページで読みました。コピー室が広く便利になり、グループ研究室が設けられ、閲覧室が広くなって各自がノートパソコンを使用できるようになったそうです。開館時間は8時から24時までです。何時かまたシュタムティッシュに陣取って本を読みふけりたいものだと思います。

(写真: 神学部3年 武田 彩那さん撮影)

二つの顔を持つ市民図書館

国際文化学部 国際文化学科 教授 井口 正俊

ベルリン国立図書館は、離れた場所に立つ二つの建物からなる。東西ドイツの分断のために二つに分散せざるを得なかったものが、「壁」崩壊後の1992年一つの名前「ベルリン国立図書館<Staatsbibliothek zu Berlin (SBBと略記)>として合併されたからである。それ故、一つは、旧西ドイツのポツダム通りの壁のすぐ西側に、ベルリンフィルハーモニー・ホールと対になる形で1978年に同じ建築様式で建てられた黄色のモダンな建物。もう一つは、旧東独のプロイセン国立図書館が大戦後、フンボルト大学の西に再建された建物である。二つの建物は、それぞれの歴史を物語るように、対照的な風采をもっている。二つの遺伝子を持つと言われるベルリンという都市の宿命が、「一つの図書館二つの建物」<Eine Bibliothek in zwei Häusern>という奇妙な関係にも遺伝しているのかも知れない。1992年以降、二つの図書館は歴史的な性格を保存しながら、新しいシステムを導入し、一般市民に開かれた、使いやすい総合図書館として機能し得る。まさに「現代の図書館」を目指している。増改築も内部機能も2013年までにはすべて完成予定だ、という。

ウンター・デン・リンデン通りの建物は、蔭の絡まる静かな雰囲気、中に入ると暗く、まさに一時代前の図書館の雰囲気がある。蔵書も中世以来、1945年までに刊行された歴史的な書物や手書き本が多く、建物の性格をはっきり意識し、閲覧者も歴史研究に携わる学者や研究者が多く、連続して訪れる人が多いそ

うだ。それに対して、ポツダム通りの建物は、主に1946年以降発行された書物を中心に置き、建物も床が高く天井も高く、照明の明暗がうまく調整されているモダンな建築であり、閲覧室も階が微妙にずれていたりし

て初めは使いにくい感じがするが、慣れてくると非常にシステムティックに配置されていることが分かる。さらに重要なのは、この図書館の稼働率の高さである。いつも閲覧席は満席状態である。研究者や学生ばかりでなく、学生や若者に人気があり、また一般市民、外国からの訪問閲覧者が多いからである。両館がそれぞれ特色を持ち、一つの図書館の単なる分館ではなく、図書館そのものに性格を異にした二つの顔があるのだ。

そもそも図書館は、かのアレキサンドリア図書館が、いわゆる「図書館」という名の最初の本格的なものと考えていいが、西欧キリスト教世界では修道院に付属する形で、大学発足後は大学付属図書館としてその機能と役割を担ってきた。アドモント修道院、エスコリアル修道院、サンクト・ガレン修道院等の付属図書館、パドア大学、オックスフォード大学、コインブラ大学等の図書館は、所蔵図書、それを納めている図書室の歴史的な姿をもよく残している典型だが、市民社会、国民国家の誕生とともに、それに代

わって「国立図書館」が公共図書館として重要な位置を占めることになる。二つの顔を持つ「ベルリン国立図書館」は市民図書館成立の歴史的経緯をもよく示している、と言えよう。

(写真: 著者撮影)



[ポツダム館の閲覧室]



[ウンター・デン・リンデン館-歴史的書物の配置された書架]

コンスタンツ大学図書館

Bibliothek der Universität Konstanz: Universitätsstraße 10, D-78464 Konstanz Deutschland
<http://www.ub.uni-konstanz.de/>

200万冊の蔵書がいつでも読み放題!
2 Millionen Bücher - lesen Sie, wann Sie wollen!

法学部 法律学科 教授 勢一 智子

表題は、コンスタンツ大学の図書館ホームページの冒頭に掲げられているメッセージである。南ドイツのバーデン・ヴュルテンブルク州にあるコンスタンツ大学はドイツには珍しくキャンパス形式の大学であり、各学部棟や大学施設が連結された複合型ビルキャンパスとなっている。スイスとの国境にあるボーデン湖畔の小高い緑地にあり、カラフルな概観が特徴的である。その中で大学図書館は、キャンパス中央部分に置かれることで各学部棟からアクセス可能となっており、まさに大学のメイン施設である。

コンスタンツ大学図書館の特色をいくつかご紹介したい。まず、大量の蔵書を誇る図書館の24時間制である。1,000席を超える作業スペースがあり、例えば、法律書のフロアでは、国家試験が近づくと深夜まで勉強に励む法学部生の姿が絶えない。次に、ドイツらしい合理的な利用管理システムである。複合型キャンパスの中心にある図書館には、各学部棟から直結する入口が各階に複数置かれており、スムーズなアクセスが実現されている。入口の総数は図書館長も把握していないほどである。その一方で、出口を1カ所に集約することで効率的な管理が実現されている。くわえて、ほぼすべて開架で



[蔵書検索コーナー]



[上層階から見た書架]

あることが挙げられる。つまり、利用者は図書も雑誌も請求手続を経ることなく直接手に取ることができる。冒頭のメッセージ通り本との自由な時間を与えられた空間である。このような先進性が評価されて、コンスタンツ大学図書館は、ドイツ語圏の図書館でのランキングBibliotheksindex 2009で第1位(大学図書館部門35館中)を獲得している。

さらに特筆すべきは、一般市民の利用も原則無料で提供されている点である。ドイツでは、大学図書館を含む公共図書館は市民すべてのための施設であるとの認識が共有されており、コンスタンツ大学図書館も例外ではない。外国からの旅行者が一時利用することにもまったく支障がない。知の泉である図書館が社会的資源と位置づけられていることに改めて感激する。

みなさんも旅の途中にコンスタンツにお立ち寄りの際には、大学図書館でときに湖を眺めながら知的刺激を得る体験をしてみたいか、でしょうか?

謝辞: 著者のインタビューに応じてくださったコンスタンツ大学図書館長ベトラ・ヘッシャー氏にお礼を申し上げます(Bei der Direktorin der konstanzer Universitätsbibliothek, Frau Petra Hätscher, möchte ich mich herzlich für ihre Hilfe bedanken.).

(写真: 著者撮影)

普段から図書館を使おう

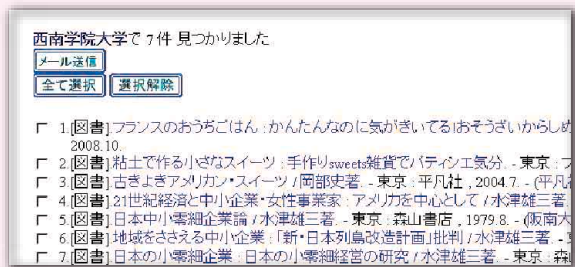
レポートや課題に取り組む直前にあわてて図書館に資料を探しに行っても、いまいち図書館を使いこなすことができていない気がすることはありませんか？図書館は意外と奥深いもの。使いこなすには、普段から図書館で調べものをするようにしてみましょう。週に1回、自分の空き時間を「図書館の時間」と決めて、図書館を使う練習をしてみてもいい？

調べものをするきっかけとして2人の例をあげました。小さな興味、小さな疑問から初めてみましょう。

人間科学部1年A子さんの場合

スイーツが大好き！だからとりあえずスイーツのことを調べてみよう！

OPACに「スイーツ」と入力して検索→7件しかヒットしない。しかもそのうち4件は「水津(スイツ)」という著者の本でスイーツとは関係ないみたい。



★OPACはスイーツをスイツと認識するので、偶然他の言葉や名前と同じものがあるとそれらも検索結果として表示します。

【例】ゴーヤー＝①野菜のゴーヤー ②画家のゴヤ ③水車小屋(ゴヤ)など

とりあえず開架3階383/8/159にある『古きよきアメリカン・スイーツ』という本を見てみることにする。

棚を見にいったら、他にもスイーツやお茶、食文化の本が並んでいた。写真は383/8/**の本の棚。

★図書館の本は書いてある内容(分野)ごとに並んでいます。同じ分野の本は同じ棚に並んでいるので、OPACに表示された本の近くに並んでいる本にも、あなたが探している情報が載っているかもしれません



本のタイトルに「スイーツ」という単語は出てこないけど、興味ある本が何冊も見つかったので借りて読んでみよう。

★借りた本

『世界の食文化②アメリカ』『イギリス紅茶事典 文学にみる食文化』

もっと調べるなら

その1 借りた本を参考にOPACでキーワードを変えて検索してみる。「食文化」「紅茶」「料理」など。

キーワード「食文化」で検索すると、検索結果は90件

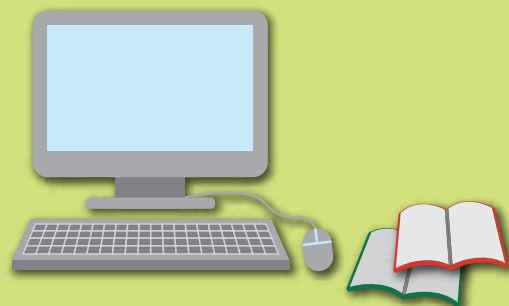


西南学院大学で 90 件 見つかりました

その2 同じ分野(同じ請求記号)の洋書の棚(4階洋書コーナー)も見てみる。



4階の洋書コーナーも、和書と同様、分野ごとに並んでいます。興味がある分野なら、外国語でも簡単に読めるかも？！



経済学部3年B君の場合

ある日、友達と立ち寄ったカフェで「フェアトレード」というマークが付いたコーヒー豆を発見。フェアトレード(公平貿易)とは、途上国の自立を促す貿易方法らしい。なんとなく興味が沸いたから、フェアトレードについて調べてみよう!

Yahooで「フェアトレード」と入力して検索すると、約5,070,000件もヒットした!

色々なサイトに、フェアトレードについての説明が書いてあるけど、誰かの個人的なサイトもあるみたい。どれが信頼できるサイトか分からないので、フェアトレードについての本も調べてみよう。

★Webサイトの情報は、信頼できるものばかりではありません。Web情報の信頼性に迷ったら、信頼性が高い本などで改めて調べ、その情報が正しいかどうか、確認しましょう。

OPACに「フェアトレード」と入力して検索→5件ヒットしたので棚を見に行く。

Yahooで見つけた「WFTO(世界フェアトレード機関)」というサイトのことが『日本のフェアトレード』という本に書いてある。このサイトは信頼できるサイトらしい。



他の本も開いてみる。本文はまだ読まずに目次や前書きをざっと眺めてみると、どんなことが書いてある本なのか、なんとなく分かってきた。

★本は、最初から最後まで読まなければならないわけではありません。目次、前書き、後書き、解説などのページを読むだけで、その本に書いてあるおおよその内容が分かることがあります。まず目次などを見て、必要なページだけを読む方が、効率よく知りたい情報にたどり着きます。



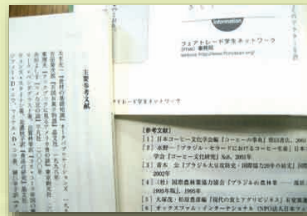
目次に書いてある見出しから、気になるページだけをじっくり読んでみる。厚い本を1冊読みきるのは大変だけれど、自分にとって必要なページだけを読むのは、そんなに時間もかからず、短時間で知りたいことを知ることもできる。

★どの本でどの情報を得たのかをメモしておくと、後から再確認したくなった時に便利です。このメモは、レポートや卒業論文で「参考文献」をまとめる時も役立ちます。

もっと調べるなら

その1 読んだ本の「参考文献」として紹介されている本も読んでみる。

その2 本に紹介されているWebサイトにアクセスしてみる。



多くの本には、参考文献や関係があるWebサイトの情報が載っています。

その3 関連する学術雑誌の記事や論文を読んでみる。

図書館のホームページから、学術雑誌の記事や論文にアクセスできます。

図書館トップページ → 学術ポータル → データベース → CiNii



CiNiiに「フェアトレード」と入力して検索すると、154件ヒット。



その4 図書館の2階にある「国際機関資料室」に行ってみる。

国際機関資料室には、国連やEUなどの国際機関から届く資料を所蔵しています。フェアトレードと関わりが深い、国連の「ミレニアム開発目標(MDGs)」に関する情報もあります。(詳しくは図書館報No.164参照)



興味があることを少しずつ調べていくと、A子さんなら、スイーツ好きが高じてお菓子のルーツや食文化について、ひとかどの専門家になることができるかもしれません。B君なら、今回調べた内容をより深め、卒業論文のテーマや卒業後の進路選択にもつなげることができるかもしれません。また、普段から図書館を使って情報を集めるようにしておくと、レポートなどで資料を集める時にもそのスキルが生かされます。

探している資料にたどり着く感覚は、宝探しに似ています。色々な情報を使いこなすことで、新たな知的好奇心も沸いてきます。普段から図書館をどんどん使ってみてください。

参考文献・Webサイト(Webサイトの最終アクセス確認は2009/9/7)

●岡部史著「古きよきアメリカン・スイーツ」平凡社2004[開架3階 383/8/159] ●本間千枝子、有賀夏紀著「世界の食文化②アメリカ」農山漁村文化協会2004[開架3階383/808/3-12] ●三谷康之著「イギリス紅茶事典 文学にみる食文化」日外アソシエーツ2002[開架3階383/8/145] ●長坂寿久編著「日本のフェアトレード: 世界を変える希望の貿易」明石書店2008[開架4階678/21/89] ●村田武著「コーヒーとフェアトレード」筑波書房2005 [開架4階617/3/4] ●ジョセフ・ステイグリッツ、アンドリュー・チャルトン著 高遠裕子訳「フェアトレード: 格差を生まない経済システム」日本経済新聞出版社2007[開架4階678/2/26] ●デヴィッド・ランサム著: 市橋秀夫訳「フェアトレードとは何か」青土社2004 [開架4階678/2/25] ●特定非営利活動法人フェアトレード・ラベル・ジャパン <http://www.fairtrade-jp.org/> ●People Tree(フェアトレードカンパニー株式会社) <http://www.peopletree.co.jp/>

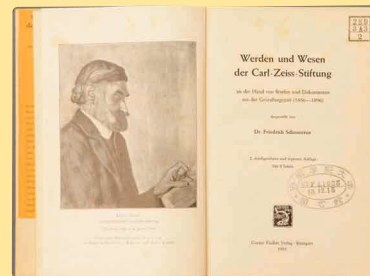
Von der „Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis“ zu „der Betriebswirtschaft“

『商業学と商業実践のための雑誌』から『経営経済』へ 全69巻

(2009年現在)



写真1: 未製本の近景

写真2: 市原季一著『ドイツ経営学』
左頁の写真がハインリヒ・ニックリッシュ写真3: 「フリードリヒ・ショメルスの下記の著書」
左頁の肖像がエルンスト・アッペ

Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis, Stuttgart: C.E. Poeschel, 1908-1929. [開架 670/54/3-]

Die Betriebswirtschaft: Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis, Stuttgart: C.E. Poeschel, 1930-1943, 1977-. [開架 335/054/15-]

『商業学と商業実践のための雑誌』(Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis)は1908(明治41)年にドイツで創刊され、今日まで100年以上にもわたって刊行され続けている学術雑誌です。1930(昭和5)年の第23巻から誌名を『経営経済』(Die Betriebswirtschaft: Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis)に変更され、1943(昭和18)年の第36巻まで刊行されました。しかし、第2次世界大戦でドイツ国内の被害が広がった1944年に休刊され、敗戦や国家の東西分割など激動の時代の変遷を経て33年後の1977(昭和52)年に第37巻として復刊され、今日に至っています。(写真1)

ドイツにはそれまでに商業の実務書の蓄積がありましたが、19世紀の中頃からイギリスのアダム・スミスをはじめとする経済学がドイツに入ってきて国民経済学が登場するようになり、商業学は大学を迫られて衰退していくことになりました。なぜなら、ドイツの国民経済学は利潤を追求する個別の企業活動の研究を好ましいものとはみなさない状況にあったからです。しかし、工業化を達成しつつあった国力はかなりのものになり、有力な実業家など資本主義経済を是認する人々の動きも活発になってきて、近代的な企業経営を担う専門的な知識や能力をもった人材の育成のための機関を求める社会的な要請が生じてきました。このことを背景に、商科大学創立の機運が熟してい、ライプチヒ科大学を先発にドイツ各地にベルリン商科大学などいくつもの商科大学が設立されていくことになりました。そのために、商科大学の中心科目になりうるだけの商業学の内容を充実しなければならませんでした。この状況を広く社会に知らせるとともに、関心をもつ人々を結集して教育と研究の進展を図る方策を講じる必要性から、雑誌の創刊が企画されました。この時に従来の商業学や経済学から独立して、個別的な経済現象としての企業経営における合理的な管理や組織などの原則を教える新しい科学を樹立する課題がのしかかり、個別の経済単位としての企業経営を研究する方法をめぐる論争を経ながら経営経済学(いわゆる経営学)が生み出されていくことになりました。

経営経済学の樹立に大きな役割を演じたのが、1908年の創刊時に編集者の一員であったライプチヒ科大学の32歳の講師ニックリッシュです。

(写真2) 彼はその後マンハイム商科大学やベルリン商科大学に勤務しつつ雑誌編集の中心人物として戦後の1946年に亡くなるまで多数の研究者の育成に努めながら、研究と教育に尽力しました。彼の意志を受け継いで、後継者たちが1977年に冷戦構造のなかに西側の地で本誌を復刊させることになりました。本誌は激動するドイツの歴史の歩みのなかで創刊、休刊、復刊の経緯を辿り、社会、政治、経済、産業、企業などの動向を如実に反映しながら、その時々経営研究分野の最善を目指す論文を掲載しています。そのことによって、企業の経営に関する知識が創造されて蓄積され、この分野の研究が進化させられていきました。

ところで、いわゆる経営学といわれるものは、アメリカではテイラーをはじめとする科学的管理運動のなかで発想されたマネジメントの理論から生み出されていきましたが、ドイツでは商業経営学の研究を進めるなかで、商業の経営よりもっと有力な経済単位になってきている企業の経営を研究することから生み出されていきました。利潤の追求が社会で一般的に承認されるビジネス文明の国の研究者とは異なって、企業経営研究が単なる私的な利潤追求の学問ではないということを証明し、そのような理論や知識を創造しなければならぬ課題を背負われたドイツの研究者たちのなかには、当初から企業倫理や企業の社会的責任を認識し、経営活動を通じて社会に貢献する使命を果たしていく方向性を示している先行の事例や研究に注目する人々もいました。その際に、注目されたものの一つに、光学メーカーのカルツァイス社の経営者アッペ(写真3)の経営思想にヒントを得て、賃金、福利厚生、設備投資、積立金、地域社会、大学などに利益を配分して厳密に計算すれば利潤はゼロになることを提唱した理論があります。

ちなみに、日本においては第2次世界大戦前に高等教育機関としていわゆる帝大とも称された大学制度とは別に、高等商業学校や商科大学の系譜があり、それらは戦後に新制大学のなかに編制され、現在に至っています。

参考文献

写真2: 市原季一著『ドイツ経営学』第4版、森山書店、1960。[開架3階 335/0/18-2]

写真3: Friedrich Schomerus, Werden und Wesen der Carl-Zeiss-Stiftung: an der Hand von Briefen und Dokumenten aus der Gründungszeit, 1886-1896, 2. durchgesehene und ergänzte Aufl., Stuttgart: G. Fischer, 1955。[開架 289/3A3/2]